

Ⅲ. 南京大学への教員派遣事業

1. 派遣教員、奈良女子大学研修生

派遣教員	小山 俊輔	奈良女子大学研究院人文科学系言語文化学領域 教授
研修生	近藤 香月	奈良女子大学文学部人文社会学科社会情報学コース 4回

2. 派遣期間

12月15日（火）関空発－南京着

12月16日（水）～12月18日（金）講義

12月19日（土）南京発－関空着

3. 事業概要

日本文化概論 12月16日（水）～18日（金）計15時間

修士課程大学院生 のべ60名あまりに対して講義を行なった（学生の出入りが激しく正確な人数は不明。最終レポート提出は14名）。

講義概要 テーマ 「日本の生活文化 1. 日本人と動物 2. 日本人と旅 3. 東日本大震災からもうすぐ五年」

奈良女子大学からの派遣事業と言うことで、「奈良」をテーマに、短時間で広く日本文化の概容が理解できるように授業計画を立てた。日本は中国から多くのものを受け入れながら、生活文化は似ているようで根本的に違うところがある。その理解を深めるために、奈良を話題の中心に置き、「鹿」を出発点として古代以来の動物との関係のあり方に1日、また伊勢参りや大仏参詣を出発点に近世の旅の歴史を紹介するのに1日を当て、日本文化の特質を具体例を挙げながら示すことを試みた。最後に現在の課題としての震災復興を取り上げた。これは今回派遣された小山、近藤がともにかかわっている問題であるからである。

一つ目のテーマである動物との関係であるが、日本人は日常的には肉食をせず、食用の家畜を持たなかったこと、それゆえ牛馬のように労働を手伝う「友」としての家畜か、山に住まう野獣としての動物しかいなかったこと、そして山が神々の住まいであるという信仰から、動物が神の使いとされるようになったという経緯を民俗学の諸説を踏まえて論じた。さらに近世には都市の発展によって山の神秘性が薄れるとともに、狸や猫という都市に暮らす動物たちが、神秘性を感じさせながらも親しい存在として愛されるようになったこと、そしてそれが現代日本のロボット開発や「ゆるキャラ」の基礎となっていることを具体例を挙げて指摘した。

二つ目のテーマである日本人と旅については、担当者小山の祖先の旅日記から話を始め、封建制度の制約を受けながらも、江戸時代にはすでに一般庶民が女子供も含めて快適に旅をできる環境にあったこと、伊勢参りだと言えば移動は全国的に自由であったことを示し、それが参勤交代や長崎通詞、藩校や私塾の活動と相まって、全国的広がりスピード、社会階層を越えた共有という特質を持つ画期的な情報システムの形成に結実したことを論じた。これが迅速な海外情報の伝達に貢献し、日本の急速な近代化を可能にしたのである。

三つ目のテーマである東日本大震災に関しては印刷資料を準備しなかったが、小山も近藤も震災の直後から継続的にボランティア活動にかかわっており、その体験を元にパワーポイントで写真とデータを見せながら震災復興の問題点と課題を論じた。この話題が最も学生の関心と興味を呼んだようである。先の二つのテーマが主に過去の歴史に係わるものであったのに対して、震災復興は現在の問題であること、そして中国も直近に震災の体験があり、かつまた驚くべき数の原発の建設が予定されているからであろう。

4. 事業評価

4-1 講義について

50名以上収容できる教室が常に満室になるくらいの受講生がいたが、年度末で忙しかったり、他の授業と重なったりしたりしたらしく入れ替わりが多くて、最終的にレポートを出したのは14名であった。担当の先生が「そんなに少なかったですか」と怪訝に思われたようであるが、すでに単位が足りていた学生もいただろうし、「三つのテーマの中で興味があるものについて自由に書きなさい」というレポートの課題も南京大学の学生には書きにくかったのかも知れない。

授業は必ず外国語学院日本語学科の先生方が立ち会われた。学生との関係もよいようで、ほとんど口出しはなく和やかに授業を進めることができた。また達者に中国語を話す近藤さんが学生と小山のあいだにずっといてくれたので、時々近藤さんに話を振って中国語と日本語のクロスオーバーで理解を図ることがあった。

学生は大学院の修士課程の学生が主であったが、多少学力にばらつきが見られた。日本への留学経験や日系企業での勤務経験がある学生もおり、話を振って体験を話してもらい、話題を広げることができた。さすがに歴史的な話題になると語彙や概念の理解に困難があるようだったが、できるだけゆっくりとしゃべりながら画像や実物、模型などを示して授業を進めることにし、質問は適宜受け付けて疑問を解くようにした。小山は何度か南京大学で留学説明会をしたことがあり、教室の機械設備には慣れていたので、スムーズにパワーポイントや画像音声データを使いながら授業を進めることができた。もともと日本文化に強い関心がある学生ばかりなので、興味を引くことができたと思う。

授業終了後にメールでレポートを提出させた。全部で14名の提出で、テーマは「動物」が

4名、旅が2名、震災復興が8名であった。総じてよく書けていたが、さすがに語彙選択や「てにをは」の付け方には問題が見受けられるものが多く、提出されたレポートを校閲してコメントとともに返却した。さらにそのお礼のメールも4通来た。

4-2 大学間の連携について

外国語学院校舎の玄関にある電光掲示板に大きく集中講義の掲示があり、本学の派遣事業への期待が大きいことが感じられた。個人としては面映ゆい限りであった。

今年の派遣では、外国語学院日本語学科先生方と交流を深めることができた。学科長以下、今回の世話役の王先生や彭先生、そして旧知の葉先生などと毎日のように会って奈良女子大学との交流の発展について話し合うことができた。たまたま忘年会の日に居合わせたため、近藤さんとともに招待され、他の学科の先生方も一緒に盛大に行く年来る年を祝ったのは楽しい思い出である。

また国際交流センターの副センター長とも会見し、実務的な話を進めることもできた。南京大学では短期留学でできるだけたくさんの学生に日本の生活を体験される計画を進めており、大学院生は女性が多く本学の協力の可能性は大きいと感じた。また近藤さんが熱心に本学のPRのパワーポイントを作成しアピールしてくれた。

2016年の4月から交換留学で本学に来る学生二名が補助役として、小山、近藤の世話に当たってくれた。彼女たちの受け入れの準備としても、今回の講義は大いに役立った。

4-3 同行した研修生による評価

文学部 人文社会学科 社会情報学コース4回生 近藤香月

私は12月15日～19日の間、小山先生の南京大学での集中講義に同行した。3日間の講義は、日中両学生にとって大変新鮮なものだった。「日本人と動物」「日本人と旅」といったテーマで、教科書には出てこない日本人の昔からの考え方、習慣、その時々文化・経済システムと関連させて動物や旅を考える貴重な機会となった。南京大学学生にとっては、「可愛(かわいい)」という対象でしかなかった奈良の鹿に「神の使いとしての鹿」という新たな視点を加えられたのではないだろうか。私が3日間で特に印象に残ったのは、旅行会社や鉄道会社でできた歴史的背景だ。江戸時代までは、伊勢参りをする人を世話する専門の役職があった。しかし明治時代に、宗教と観光を分けなければならなくなり、その代わりを担うべく設立されたのが旅行会社だった。今の日本旅行(株)や近鉄(近畿日本鉄道株式会社)がその例である。実際、近鉄は京都・大阪・名古屋という大都市と伊勢を結んでいる。今まで何気なく使っていたものに、当時独特の背景を見出し、大変興味深かった。

3日間の講義の中で、私も学生発表の機会を設けてもらい、奈良女子大学や奈良の紹介などを行った。1日の最後の時間に学生発表を行ったにもかかわらず、誰一人として出て行ったり携帯電話で遊んだりすることなく、真剣に耳を傾けてくれたことから、中国で5本の指に入る名門校の大学院生はやはり違うなと実感したのを覚えている。奈良女の紹介を受

けて、来年度から奈良女に留学予定の学生から「留学は不安だったけど、雰囲気や奈良女について知ることができたので少し安心しました」という感想が聞かれた。さらに、東日本大震災のボランティア活動について話した時には、東北にボランティアしに行きたいがどうやって申し込めばいいのかと質問があった。日本に来る学生の不安を軽減させられ、東北への思いをつなげられた、この2つの場面で南京に来て良かったと改めて感じた。



■家畜と神の使い

- ・縄文時代には犬を飼っていた。
- ・家畜としての牛馬 『魏志倭人伝』に「牛馬なし」と書かれている。古墳時代（4～5世紀）に輸入か。
- ・ただし日本における牛馬飼育は独特である。
牡に去勢手術をしない。蹄鉄を打たない。だから古墳時代に、中国大陸や朝鮮半島から騎馬民族がやってきたという説は成り立たない。
- ・天武天皇の肉食禁止令 天武四年（675年）狩猟・漁獲の制限を設け肉食（牛馬、犬、猿、鶏）を禁じる。鹿と猪は別。動物愛護と言うより稲作の奨励。
- ・ペットとしての犬猫 犬は縄文時代から人の仲間。猫は仏教伝来とともにやってきた。昔の絵を見ると、猫を紐につないで、犬は放し飼い。
- ・狩猟対象としての野獣 熊、鹿、狼、兔など。
- ・神の使い 春日大社 = 鹿、稻荷神社 = 狐、大黒天 = 鼠、八幡神社 = 鳩、天神様 = 牛、熊野神社 = 鳥など 招き猫は特定の神様と結びつかず
- ・特別な位置づけの動物 狸（たぬき）

■鹿

- ・奈良と言えば鹿。500haの奈良公園の至る所にいる。
- ・春日大社には石灯籠（いしどうろう）の奉納も多い。
「鹿の数か、灯籠の数をきちんと数えたら幸せになるそうだ」
「よし、やってみよう」
（しばらくたって）
「鹿は何匹いた？」
「しかとわからん。」
「灯籠の数は？」
「どうろう（とうとう）わからなかった。」おしまい
- ・春日大社の鹿 他に鹿がいる神社 安芸の宮島 博多志賀島（鹿の角を集める）
なぜか海路の安全を祈る神社である。海と鹿は関係があるのだろうか。鹿は泳ぐことができるけれど・・・
- ・春日大社の曼荼羅などを見てみよう。神様が鹿に乗って旅をしている。
- ・ちょうど12月15日から17日までは、「春日若宮おんまつり」。今から千年近く前に春日の神様に子供が生まれた。その若い神様を山の中から町へとお迎えして、一日楽しんでいただく。

- ・山と人里を行き来する鹿。

■狐

狐は米を食べる鼠を食べるために、役に立つ動物とされたらしい。後に中国から「九尾の狐」伝説が伝わり、女性に化けて悪事を働く怖い動物のイメージができた。

- ・晴れた日に急に雨が降ることを「狐の嫁入り」（きつねのよめいり）という。
- ・狐は油揚（あぶらげ）が好きだと言われる。大阪名物「きつねうどん」は、油揚の炊いたのが乗っている。

□「葛の葉」（くずのは）伝説 信太の森の狐 安倍晴明の誕生秘話

今の大阪市の南部に安倍保名（あべのやすな）と言う男が住んでいた。ある日彼は信太の森（しのだのもり）で、傷ついた白狐を助ける。やがて葛の葉という女の人が見れ、保名と恋に落ちて結婚する。一人息子ができるが、葛の葉が狐であることがわかり、彼女は泣きながら森に帰っていく。息子は成長して安倍晴明（あべのせいめい）という陰陽師になり、天皇に仕えて京都の安全を守って活躍する。

- ・この物語は、人形浄瑠璃、歌舞伎、舞踊、映画などでたびたび取り上げられた。最近では映画『陰陽師』（おんみょうじ）の主人公が安倍晴明。演じたのは野村萬斎。

■動物を描いた絵巻物

□鳥獣戯画

・平安時代に描かれた絵巻がまとめられたもの。現在は京都梅尾（とがのお）高山寺（こうざんじ）の宝物。高山寺に住んだ明恵上人（みょうえしょうにん）の「かわいいもの」好きと関係があるかもしれない。

・明恵上人(1173-1232) 現在の和歌山県生まれ。幼くして僧侶となり東大寺などで仏教を学ぶ。学問研究とともに戒律の護持、貧民救済などに努力。大きな寺に住むことを好まず、山の中を転々として修行を続けた。二度インドに渡って仏教を極めようと考えたが、そのたびに春日明神が夢に現れて辞めるように説得、断念した。京都の北の山の中に高山寺を創建、そこに暮らしながら人々の指導に当たった。

- ・『鳥獣戯画』の人気は現在も。「鳥獣戯画」作成ソフトが開発されている。

□十二類絵巻（じゅうにるい えまき）

室町時代、およそ 1440 年前後に成立したと考えられている。現在 10 種類の伝本が確認されている。

十二支の動物たちが、歌作りのコンテストをしようと集まる。審判を鹿に頼むと快く引き受けてくれた。あまり楽しかったので二回目をやろうとするが、今度は鹿は忙しい。狸が「私がやりますよ」と提案したが、ふだんから狸が嫌いだった十二支の動物たちは、狸

を追い出してしまう。怒った狸は仲間を率いて戦を仕掛け、十二支軍と狸軍の合戦になる。狸は鬼に化けたり奮戦するが、結局負けて出家し、偉い僧侶の弟子になる。

600年近く前の話だが、どう考えても漫画みたいである。

■狸

都会でも日常に見かける。奈良女子大学キャンパスにもいる。

信楽焼の狸の置物は、しばしば民家の庭で見かける。

□日本三大狸

・淡路の芝右衛門狸（あわじの しばえもんだぬき）

淡路島（兵庫県）の山の中に住んでいて、旅人に親切にしたり、にぎやかな狸囃子で里の人を楽しませて人気があった。大阪の歌舞伎芝居が面白いという噂を聞いた芝右衛門は、人間に化けて芝居を見に行くが、犬に正体を見破られて噛み殺される。山が寂しくなったのに気がついた淡路の人は、芝右衛門が死んだことを聞いて神社に祭る。その後大阪の芝居のお客が減った。芝右衛門が死んだせいではないかと考えた大阪の芝居関係者は、淡路までお参りに来るようになった（この習慣は今も続いている）。

・讃岐の太三郎狸（禿狸）（さぬきのたさぶろうだぬき）

讃岐（香川県）の屋島に住んでいた。唐から来日の途中失明した鑑真が、奈良に向かう道案内をした。また弘法大師空海が、四国で修行するときも手伝った。立派な人間に出会って感動した太三郎は、全国の狸を集めて教育に当たった。宮崎駿の『平成狸合戦ぽんぽこ』に登場します。

・佐渡の団三郎狸（さどのだんざぶろうだぬき）

佐渡に住んでいた。よく人をだまして遊んでいたが、困っている人にはお金を貸してくれた。ただしきちんとお金を返さないと、ひどい仕返しをした。

□その他有名な狸

・金長狸（きんちょうだぬき） 四国の徳島にいた。怪我をしたところを人間に助けられて恩返しをする。しかし狸仲間の喧嘩に巻き込まれて死んだ。今は金長神社に祭られている。

・分福茶釜（ぶんぶくちやがま） ある狸は仲間と化け比べをしていて、茶釜に化けたときに戻らなくなってしまう。拾った人間に束子（たわし）で磨かれたり火にかけられたり、さんざんな目に遭うが親切な古道具屋に助けられる。お礼に茶釜の曲芸を見せてお金を稼ぐが、疲れて死んでしまう。古道具屋さんはお寺に頼んで、丁寧なお葬式を出した。

・狸囃子（たぬきばやし） 荒れ果てたお寺に新しい和尚さんがやってきた。庭にはお化けや妖怪、幽霊がたくさん住み着いている。夜になると太鼓を叩いて歌う声が出て寝られない。和尚さんは自分も太鼓を叩いて歌って、さらに盛り上げる。ある朝お腹に穴の空いた狸が庭で死んでいた。和尚さんは立派なお墓を建ててあげた。

・鉄道と狸 明治になって各地に鉄道が建設されると、狸たちは列車に興味を持って、夜中になると列車に化けて線路を走り、人々を驚かせていた。ある夜臨時の夜行列車が走った。翌朝線路で狸がいっぱい死んでいた。

■猫

猫は貴族やお寺にいる珍しい動物だったが、蚕や農作物を鼠から守る動物として、江戸時代に親しまれるようになる。ただ不幸な女性の霊魂が猫に乗り移って化け猫になるという怪談があり、ふつうの猫でも年を取ると手ぬぐいを頭に被って踊ったり、人の言葉をしゃべったりするという伝説がある。

・招き猫

由来はよくわからないが、江戸時代には流行していた。一説では、ある大名が江戸近郊を散歩している時に、お寺の門から猫が顔を出して招いた。ちょうど雨が降ってきたので、猫に感謝した大名は、そのお寺に大金を寄付した。それがいまの豪徳寺（ごうとくじ）である。その大名は滋賀県の彦根市に城を持っていたので、彦根市は「ひこにゃん」をマスコットにしている。この「ゆるキャラ」の人気を見て、あちこちで「ゆるキャラ」が作られようになり、「くまもん」は大ヒットした。

・初辰さん（はったつさん）

大阪の住吉大社の縁起物（えんぎもの）。毎月最初の「辰の日」にお参りするともらえる。四年かけて48個を集めると、「四十八辰」＝「始終発達」（しじゅうはったつ）で縁起が良いとされる。

・たま駅長

2006年に廃業が検討されていた和歌山電鉄の貴志駅（わかやまでんてつ きしえき）駅長に、社長から正式に任命される。それが話題になって、和歌山電鉄の経営は劇的に改善、和歌山県知事からも感謝された。2015年6月に亡くなるまで駅長を続けた。

■自然の中の神とのインターフェイス

・米作りにおける里山との関わり。何より必要な水を与えてくれる山と森。そこに住む動物たちは、人間と神をつなぐ存在。

・都会の野生動物である狸。思いがけないところで、都会と自然の世界がつながっている。

・猫には謎めいたところはあるが、自然とのつながりは感じさせない。むしろ人間が自分の姿を映し出しているところがある。

■現代に生きる「動物」たち

・キティちゃん

・ドラえもん

・ロボホン

■「小山この」さんの旅

明治20年頃、兄と下男を連れて丹波（いまの兵庫県中部）を出発、西国三十三カ所を回った後、宮津（今の京都府北部）から船で直江津（新潟県）へ、山を越えて信濃（長野県）の善光寺に参る。東に向かい日光（栃木県）を見物、南下して東京に到着。東京見物の後横浜から船に乗り、神戸に帰る。神戸から歩いて二日で帰宅。

・日本では武士社会は男子相続であったが、農家や商家では、女子が相続する習慣があった。女子に、近隣で最も頭が良く勤勉な男性を婿養子（むこようし）に迎えて、家を継がせるほうが有利だから。兄弟は隠居して、学問や絵画音楽などに没頭して暮らした。「この」さんも家でいちばん偉い人だった。

・旅行に現金を持ち歩く必要はなかった。江戸時代にすでに為替（かわせ）を使った全国的な金融のネットワークができていた。地元の両替商（りょうがえしょう）にお金を預けると「手形」（てがた）を発行してくれる。その両替商と取引のある店は全国各地にあって、指定された店で手形を現金に換えることができた。

・「両替商」とは、江戸時代の日本が金銀銭の三貨体制だったために生まれた商売である。東日本と武士は金、西日本と商人は銀をおもに使い、一般大衆はもっぱら銭を使っていた。この三つの価値は毎日変動し、両替商は複雑な計算をしながら日本経済を支えていた。

・この金融ネットワークは、物流のネットワークに支えられていた。日本全国の米は大阪に集まり売買され、代金はどんな辺境にでも送金されていた。たとえば北海道の昆布は大阪で取引され、沖縄から中国まで送られていた。

・大阪の堂島に米相場（こめそうば）があり、全国の米を売買していた。ここで世界初の「先物取引所」（さきものとりひきしょ）が誕生した。The first futures exchange market was the Dojima Rice Exchange in Japan in the 1730s, to meet the needs of samurai who—being paid in rice, and after a series of bad harvests—needed a stable conversion to coin.[Wikipedia: future contract] また「旗振り通信」も発明されていた。

■聖地巡礼

・「この」さんの旅は、前半は聖地巡礼、後半は文明開化の東京や神戸見物である。

・神や仏との結縁（けちえん）。観音信仰に基づく西国三十三カ所巡礼。弘法大師（こうぼうだいし）信仰に基づく四国八十八カ所遍路など。伊勢神宮、信濃善光寺も人気。

・修行の旅。関西では、紀伊半島の「大峰奥駈」（おおみねおくがけ）が有名。標高1,800m前後の山脈を100km以上歩き続ける。ユネスコ世界文化遺産の一つに指定。

・歌枕（うたまくら）、物語に出てくる場所の探訪。『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』『百人一首』などに出てくる場所をめぐることが好まれた。奈良や京都の観光は、これに支えられていると言ってよい。

□現代の聖地巡礼

『響けユーフォニアム』の例。

■伊勢参り（いせまいり）

平安時代に貴族が寺社に参詣する際、世話をする人を「御師」（おんし）と呼んだ。有力寺社は勢力拡大のため、武士や農民にも布教し、全国に組織を広げた。「御師」は宗教活動と観光案内を同時に行う存在だった。最大の組織は、伊勢の山田（現在の伊勢市）を本拠にしていた。彼らの活動から生まれたものが、現代にも生きている。

□山田羽書（やまだはがき）

旅に出る前に客が「御師」にお金を預けると、「御師」はそれに応じて「羽書」という紙切れを渡してくれる。伊勢まで旅する客は、現金を持たず、その紙を宿に渡しながら旅行できた。いま残っている一番古い「羽書」は1610年発行。小切手、あるいは紙幣のもとで、紙幣としては宋代の「交子」に次いで古いのではと言われる。

伊勢の松阪から出て京都や大阪、江戸で呉服屋・両替商などを営んだ三井家は、「松阪羽書」の発行に関わっている。いまの三井住友銀行のもとである。

□伊勢講（いせこう）

伊勢まで歩くのは時間的にも金銭的にもたいへんだった。田舎の村ではみんなでお金を積み立て、代表を選んで秋から春にかけて旅に送り出した。代表はみんなのお金で伊勢まで往復し、お土産を買い、京都や大阪の最新情報を伝えた。この団体でお金を積み立て分配するシステムを「講」と呼んだ。他に「大峰講」（おおみねこう）、「大師講」などがあつた。江戸時代、都会には、旅行とは関係なくみんなでお金を積み立て必要な人に貸す「講」がたくさんあつた。今では法律で禁止されているが、小規模民間金融の原型である。

□旅行会社・鉄道会社

明治になって宗教と観光を分けることになって、「御師」は禁止される。その代わりに旅行会社が設立された。伊勢参りをおもな目的に設立された会社の例が1905年設立の「日本旅行（株）」である。現在はJR西日本の子会社。

近鉄（近畿日本鉄道）は、京都・大阪・名古屋という大都会と伊勢を結んでいる。要するに伊勢参りのための鉄道である。子会社に「近畿日本ツーリスト KNT」という大きな旅行会社を持つ。近鉄は伊勢、および隣の志摩地域に、ホテルやリゾート施設を多数設立して観光客の誘致に努めてきた。2016年に先進国首脳会議（サミット）が伊勢志摩で開催されるが、こういう歴史が背景にある。

なお大阪にはもう一つ阪急（はんきゅう）という巨大な鉄道会社がある。阪急は逆に何もなかったところに線路を引き、後から高級住宅街や観光地を開発する手法を採った。「宝塚歌劇団」（たからづか かげきだん）は、「阪急文化」の代表とされる。

□おかげ灯籠（とうろう）

「伊勢に参る」と言えば、主人や親でも止めてはいけないと言われた。また「伊勢参り」を理由にすると、通行手形が簡単に出了（当時武士も庶民も移動が規制されていた）。また伊勢参りの人を見かけたら、必ず助けなければならなかった。そのため何かのきっかけで、日本の人口の十人に一人が伊勢を目指す大規模な移動が起こった。これを「御蔭参り」（おかげまいり）という。江戸時代には 60 年に一度くらい、「御蔭参り」があった。ようするに江戸時代でも、ほとんどの日本人は自由に移動できたのだ。江戸からは 15 日、岩手県の奥からは片道 100 日。その旅人の便利のために、いろいろな宿、茶屋など施設が作られ、「おかげ灯籠」は今も各地に残っている。

□犬の金比羅参り

讃岐（香川県）の琴平宮 = 金刀比羅さんは、海運業者や商人の信仰を集めていた。お参りしたいのに時間がとれないときは、飼い犬の首に「琴平に参ります」と書いた袋を下げてお金を入れておけば、旅人が世話をして江戸からでも琴平まで連れて行ってくれたという（ほんとうかな?）。そのせいで、ふつう神社に犬を連れて行くと叱られるが、琴平さんは大歓迎。

伊勢や善光寺にも、犬が代わりに参ったという伝説がある。

現代には、自分の代わりにぬいぐるみを旅に連れて行ってくれる旅行社がある。これはほんとう。

■旅する武士

□参勤交代（さんきんこうたい）

江戸時代の大名は、領国に城を持つと同時に江戸に屋敷を与えられ、一年おきに往復する義務があった。4 月に移動が始まるが、前年の 10 月には準備が始まる。予算、人員、道具、服装などもたいへんだったが、いちばん困るのが他の大名の移動とぶつからないように工夫することだった。いちばん遠い薩摩（鹿児島）の島津家は、2,000 人の武士が 1700km を、徒歩と船で 50 日かかって移動した。たいへんな時間とお金がかかっているが、この制度のおかげで、江戸の情報はすばやく日本の隅々にまで伝わった。

大名ではないが、長崎のオランダ商館館長も、江戸に参勤するしきたりだった。途中大阪や京都で、西洋文化に関心のある人々と情報交換をしながら旅をした。

このように江戸時代は鎖国して停滞した時代と思われがちだが、長崎からヨーロッパの情報が江戸まで届き、武士は一年おきに故郷と江戸を往復していた。一般庶民も伊勢参りなどの名目で、自由に江戸や京都、大阪を経由して旅をしていた。ヨーロッパからの情報は、またたくまに日本全国に届いたのだ。

□伊能忠敬（いのう ただたか 1745-1818）

上総（かずさ いまの千葉県）の商家に生まれる。名主（市長のようなもの）を務めた後 50 才で隠居、天体観測と暦の作成の勉強を始める。正確な暦を作るために日本の緯度経度を測定することを思い立ち、幕府の許可を得て 55 才から歩いて測量を始めた。十回に分けて日本全国の海岸線を踏破し、精度の高い全国地図を作成した。四千万歩以上歩いた計算になり、彼の使った測量器具類は国宝に指定されている。

□清河八郎（きよかわ はちろう 1830-1863）

出羽（でわ いまの山形県）の下級武士の家に生まれる。江戸で学問と剣を学び、塾を開く。1855 年の三月から九月まで母親を伴って旅行、故郷の鶴岡から善光寺、名古屋、伊勢、奈良、京都、大阪、安芸宮島まで行き、江戸、日光を回って帰っている。旅日記『西遊草』は克明に当時の社会風俗を記録している。その後清河は、徳川幕府の打倒を画策、浪人を集めて「新撰組」（しんせんぐみ）を結成、自分の軍隊にしようとして失敗、暗殺された。その後新撰組は、近藤勇、土方歳三、沖田総司らに率いられて徳川幕府のために戦うことになる。

■思いがけない旅をした人 中浜万次郎（なかはま まんじろう 1827-1898）

土佐（とさ いまの高知県）足摺岬近くの中浜という漁村に生まれる。子供の時から漁に出ていて読み書きはできなかった。14 才の時船が遭難、アメリカ船に救われてハワイに行く。頭の良さを認められて船長の養子となり、ジョン・マン John Mung と名乗る。アメリカ東海岸の町で学校に通い、優秀な成績を収めた。船員として働いていたが、妻の事故死をきっかけに日本に帰りたくなり、大陸を横断してカリフォルニアで金を採掘、自分の船を買い、1850 年沖繩に戻った。そこから薩摩（今の鹿児島県）に連行されるが、当時の薩摩藩主は開明的な人で、ジョン・マンを厚遇してアメリカについての知識を収集した。その後やっと 11 年ぶりに土佐に帰り、その科学知識を評価されて武士に取り立てられる。ただ彼は日本語の読み書きができないままだった。

欧米が日本近海に出没しているのに危機感を持った徳川幕府は、万次郎を江戸に呼び寄せ直参旗本（じきさんはたもと 将軍直属の高級武士）に取り立てる。仕事は英語、アメリカ事情、造船技術、測量、航海術などの教授だった。

1860 年幕府の船「咸臨丸」（かんりんまる）で、勝海舟（かつかいしゅう）、福沢諭吉（ふくざわゆきち）らとともにアメリカに派遣され、修好条約の締結にあたる。帰国後も江戸、土佐、薩摩で英語教育や航海術を教え続けた。明治時代になると東京大学の英語教授になるが、日本語の読み書きが不得意のため不遇だったと言われる。

彼がアメリカまで行かなければ、また日本に無理に帰ってこなかったら、日本はどうなっていただろうか。

以下は、南京大学外国語学院日本語学科の学生が運営している学科公式ホームページに掲載された、今回の集中講義の紹介である。

奈良女子大学集中讲座圆满结束

2015-12-18 NJUNIPPONGO 2015年12月16日至18日，奈良女子大学小山俊辅教授来到南大为日语系同学做了为期三天的讲座，该校近藤香月同学担任助教。讲座的主题是“通过奈良来思考日本的生活文化”，主要内容有两个方面：1、通过奈良的鹿来思考日本人和动物的关系；2、通过奈良的大佛来思考日本人和旅行的问题。

第一天的讲座题目是“日本人和动物”，小山教授向大家详细讲述了日本的猪狗牛羊等的历史，比如说狗早在绳文时代就已经被印刻在陶器上，深受日本人喜爱。牛马等家畜是4世纪左右从中国引进的。在日本天武年间的675年左右，天皇发出了肉食禁止令，不得食用牛马狗猴鸡等动物，且很早以前日本人就将猫狗作为宠物爱护有加，由此可见日本人对动物的喜爱从古代就已经非常盛行。

而且鹿、狐狸、狸、老鼠、鸽子、牛、老鼠等动物作为“神差”与宗教关系密切，是将人与神连接起来的中介，备受日本人的喜爱和尊重。例如，在奈良公园随处可见鹿的身影，鹿和春日大社有着深厚的联系，因为每年神会骑鹿来人间一次，这些神话传说从古至今广为流传。

狐狸作为稻荷神社的象征，在日本也是随处可见深受喜爱。关于狐狸，既有从中国传到日本的九尾狐的传说，也有日本人根据狐狸发明的狐狸乌冬面等。相传日本著名的阴阳师安倍晴明的出生也与狐狸有千丝万缕的联系，因为传说他的生母葛叶是由狐狸化身为人。这个故事被改编成歌舞伎、舞蹈、电影等，至今仍广为流传。

此外，日本古代也有许多关于动物的绘画。如平安时代的《鸟兽戏画》和室町时代的《十二类绘卷》。据说《鸟兽戏画》和喜欢动物的明惠上人有着密切的关系，《十二类绘卷》则是根据十二支动物为原型绘画的。

小山教授以生动活泼的语言向大家讲述了日本人和动物以及宗教的关系。

第二天的讲座题目是日本人和旅行。小山教授以他祖辈的故事为开端，给大家讲述了日本江户、明治等时期的社会风貌。从旅行时不便携带大量现金，讲到江户时代的金融机构货币兑换以及日本早期以大米作为一般等价物等历史。

此外，小山教授还讲述了圣地巡礼、参拜伊势、武士的参勤交代等日本人的旅行。圣地巡礼一般指信仰观音的西国三十三地巡礼及信仰弘法大师的四国八十八地巡礼，表现出日本人的宗教信仰和旅行的关系。日本和歌中出现的歌枕大多是巡礼圣地。参拜伊势神宫始于平安时期，和当时的贵族社会紧密相关。为了使日本各地的人更加便捷地参拜伊势神宫，近铁（近畿日本铁道）建造了多条铁路将京都、大阪、名古屋与伊势连接。当然，也催生出日本旅游

业的发展。武士的参勤交代更多是出于政治上的考虑，使大名们在江户和自己的地盘之间往返，这在当时既促进了经济的发展，也使江户的信息可以迅速传播到日本的各个角落。在讲座的最后，近藤同学给大家介绍了奈良市和奈良女子大学的一些情况，使我们更加了解了历史文化名城奈良的风貌、地位，以及奈良女子大学的办学特色。

第三天的讲座分为两部分。上午，小山教授对日本历史上一些旅行的名人，如伊能敬忠、清河八郎、中滨万次郎等进行了详细介绍。伊能敬忠以脚丈量日本国土，画出了精度较高的全国地图；清河八郎带着母亲游历了日本各地写出日记《西游草》；中滨万次郎则因为其离奇的身世，了解了欧美文明，为日本的近代化做出了自己的贡献。时至今日，旅行依然是人们生活中不可或缺的一部分。小山教授说在日本各地都可以看到中国游客的身影，并引导我们从这些现象去发现旅行的真正意义，希望中国游客通过旅行加强中日两国的友好联系。

下午，小山教授向大家讲述了 2011 年东日本大地震以及奈良女子大学学生为灾后重建所做的努力。例如，奈良女大的学生利用业余时间和假期，通过举行圣诞活动、贩卖手工点心等方式，为釜石县商业街的复兴做出了力所能及的贡献。小山教授通过与其他大学相比较，指出奈良女大的支援活动连续性很强。

最后，小山教授对日本东北地区的真正复兴（包括心理的重建）提出了自己的疑问并表示了忧虑。讲座的后半部分，近藤同学对东日本大地震的受灾情况进行了介绍，讲述了地震后自己的一些经历，并对震后重建中“心理”康复提出了自己的见解。

通过三天的讲座，我们比较系统地了解了日本人的生活文化中动物的形象和旅行被赋予的特殊含义，收获很大。

小山俊辅教授（右三）、近藤香月同学（左三）

参加外国语学院迎新年晚会

据悉，由奈良女子大学教授的担任的集中讲座已经持续多年，小山老师这是第二次来南京大学讲座。另外，两校之间学生交流也十分频繁，担任本次助教的近藤香月同学曾在南京大学留学两年，今年春季刚刚返回奈良女子大学，她说一口非常流利地道的汉语；日语系研二张凯丽和王雪莹学姐也将于明年 4 月赴奈良女子大学交换留学。小山教授和近藤同学在 12 月 17 日晚上还参加了外国语学院的迎新年晚会。

文 / 张楠（学硕 2015 级）

图 / 赵仲明、遊心